

求人数が増えていく理由

本校には毎年、学科を問わず、就職希望者に対して十数倍以上の数の求人（有効求人倍率14〜30倍）をいただきます。また、病院・施設・園・店舗から、「卒業生がほしい」という要望を聞くことも、年を重ねるごとに増えています。

本校の教育理念、理想とする人間像、各学科が描く職業像は、いずれも、「現場に必要とされる存在」を見据えています。求人の数は、本校の教育と、本校で学ぶなかでの学生たちの努力の、ひとつの成果であると捉えています。

加えて、就職に向けた準備に対して教員たちがさまざまなかたちでサポートを行っていることと、本校が地域とのあいだに信頼関係を築こうとし、結果として優良な病院・施設・園・店舗とのつながりが確立されていることの2点が、今日の求人数に結びついていると考えています。

本人が望む場所で、できるだけ長く

本校教員は、学生たちの就職に際し、共通した考え方を持って指導に当たっています。それは、すべての学生が、本人が「ここで働きたい」と主体的に思える場所で、長く活躍し続けることを見据えた就職をサポートする、ということです。

その上で、個々の学生に向けて、就職に当たって課題

大切にしていること ——「希望の職場」実現

となる点・本人が助けを必要としている点を中心に、それぞれに合わせたサポートを行っています。そこに、教員たちが、労力や時間を惜しむことはありません。学生に対する基本姿勢として、どのような理由であれ「ここに行かされた」という感覚を持たせないようにすることを重視しています。そのため、最終的な判断は必ず学生自身に決めさせます。その判断に客観性を持たせ、できるだけ本人にとって正しいものになるように、学校は、可能な限り多くの情報・判断材料を提供することに力を注ぎます。

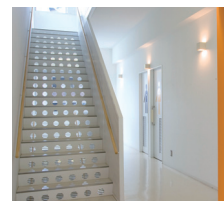
「求人票の出ていない小規模な園を希望した学生がいました。見学に訪れた際に、本人なりに魅力を見つけたようでした。そこで、直接電話をかけさせて、「勤めたいです」という希望を申し出てみたらどうか、と提案しました。電話のかけ方から希望を伝える方法まですべて指導し、臨んだ結果、求人をいただくことができました。自分の働く場所を自分で開拓したケースでした」（リトミック保育学科・教員）

「考える↓アドバイス」の順序

就職サポートに際しては、学生たちにまず自分で考えさせ、考えた結果をもとに、適切なアドバイスをを行う、という順序を必ず守るように意識しています。

アドバイスでは、学生一人ひとりの適性や希望を多面的に把握し、それらを十分に踏まえ、本人が考えた就職

理学療法学科夜間部の授業が終わった時間。年齢も、これまでの経歴も大きく異なる学生たちが、共に学んでいます。



先以外の選択肢を示します。興味・関心を持った就職先については、見学やボランティアに出向いて必ず自分の目で確かめるよう指導します。その上で、学生が考え、教員がアドバイスをを行うという基本の順序を繰り返していきます。

例えば理学療法学科の学生たちは、就職担当を兼ねる北浜伸介学科長を通じて、求人応募を提出します。その提出前に、すべての学生を対象に、約30分程度の学科長面談が行われます。本人の希望や興味・関心を聞いた上で、「こういう病院から求人がきているがどうか？」「この病院の特色は〇〇など」 「ここはこれから△△の展望が開かれる可能性が高い」など、学生一人ひとりに対して有益な情報を探り、それを伝えるように努めています。

一方で、就職を具体的に意識するようになる2年生（理学療法学科は3年生）の夏以降、「いまの自分」と「職場でのあるべき姿」のギャップをあぶり出し、本人の自覚のもとに改善を図る努力を促します。そのギャップが、知識・技術によるものか、働くことへの心構えによるものか、などによって、それぞれの導き方を模索します。

例えば介護福祉の現場では、施設入居者が廊下で待たされていたり、ケアが途中で中断されていたり、という様子が見えたら、施設運営と心のあり方になんらかの問題を抱えていると考えられます。

また、保育の現場で、職員がいつも走り回っていたり、泣いている子どもたちが特別な意図なく放置されていたりする場合も同じです。実習や見学の経験を、就職先を決める時のために最大限に活かすためにも、「何を見るべきか」を指導することを、とても大切に考えています。

「マッチング」のための工夫

長く活躍し続けることのできる就職先を見つけるために、対象となる病院・施設・園・店舗が、学生自身の性質とマッチしていることも大切です。

理学療法法の現場では、病院と高齢者施設で、仕事の内容・力点が異なります。また、急性期・回復期・維持期のどの患者さんに対応するのかということも、就職先によって確率は異なります。

介護福祉の現場では、高齢者施設と障がい者施設とでは、介護福祉士に求められる技術、とくにコミュニケーション能力が大きく異なります。保育や医薬品販売の現場にも、同じことが言えます。

ひとつくくりの職業でも、それぞれに専門性があり、求められる力が違う。であれば、現場を細かく分けて考えた時に、自身の心がどこへ向いているのかを、学生たち

「優良就職先」を見定める目

医療福祉に携わる仕事は、基本的に、すべてが高い志のもとで行われていると考えています。しかし現場における現実として、さまざまな事情や環境によって、「対象者のため」が優先されていないケースも、少なくはありません。高齢者施設や保育園などに関する日々の報道によって伝えられる事故や事件のニュースは、本校にとって、身近な問題でないとは言えません。

だからこそ、本校の学生たちには、現実が100%ではないとしても、医療福祉のあるべき姿を追求する姿勢を保ち続ける就職先を見つけてほしいと思っています。そうした就職先で、現場を担うことのできるひとりになってほしいと願っています。

そのためには、何をもち「優良就職先」であるか否かを判断するのか、という目を養うことが必要です。ここでも、教員たちが判断基準を直接的に教える方法は採りません。ただ、日常の授業や、実習もしくは見学時に、そうした視点で病院・施設・園・店舗を見るとき、発想を持たせる工夫を行います。

が自分で認識することが大切になります。

子どもたちの幸せな未来を願って保育士を志す学生の夢を、さらに紐解いた時に、一般の園で共働き家庭の子育てを支えたいのか、障がい児保育に携わって障がい児たちの未来を広げる手助けをしたいのか、が見えてきます。

心の向く先が分かれば、必要な知識・技術と心構えが、自ずと見えてきます。そうした考え方によって導き出された「必要なもの」「足りないもの」に備えることが、ひとりの学生にとって本当に必要な就職準備だと考えているのです。

理学療法学科・医薬健康学科における国家試験対策にも、教員たちによる徹底したサポート体制を整えています。ひとこと例えば「最後まで面倒を見る」ということで、授業を中心とした反復学習を基本とし、試験前に補講を実施します。

さらに、国家試験担当教員を設け、ここに国家試験の状況と、全学生の情報を集約させる仕組みをつくり、集めた情報をもとに、一人ひとりにとってベストの指導をめざしています。

一方で、国家試験で不合格だった学生に対するフォロー体制も構築しています。「最後まで面倒をみる」は卒業後も続き、希望者は「リトライ組」として、卒業後も校内で学習を続ける環境を整え、夜間に特別授業を数コマ組み入れるなど、無償によるバックアップを行っています。